

令和4年9月5日

南の風アカツキジャパン女子日本代表特集号Ⅶ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

ラトビアとの第2戦の最終スタッツです。

	3PTFG	2PTFG	F T	REB	T O	score
日本	14/36 39%	11/29 38%	10/14 71%	35(OR9, DR26)	8	74
ラトビア	4/25 16%	14/35 40%	8/20 67%	50(OR17, DR33)	21	48

第1戦目も紹介します。

	3PTFG	2PTFG	F T	REB	T O	SCORE
日本	8/36 22%	25/42 60%	9/16 56%	34(OR11, DR23)	7	83
ラトビア	8/22 36%	13/31 42%	4/5 80%	44(OR8, DR36)	33	54

第1戦、2戦を比較しながら見ていきます。

まず気がつくことは、ラトビアのTO（ターンオーバー）の数です。第1戦が33、2戦は21です。通常の試合では中々見ない数字です。日本女子代表の1試合通してのプレスディフェンスの威力と成果が際立ちます。

継続したプレスの威力は、日本女子代表全員のフィジカルの強さを含めた体力とシステムの実行力の高さです。そしてこれらを支えているのが、「タイムシェアして戦う」という戦術です。

15人（ワールドカップ本番は12人）の誰がコートに立ってもディフェンスのパフォーマンスが落ちず、相手の体力を削りストレスを与えるこの戦術は、勝負の後半に必ず効果を発揮すると思います。

次にシュートです。決定率を書きます。《1・2戦のトータル》

3Pシュート 22/72 30.6%

2Pシュート 36/71 50.7%

F T 19/30 60.3%

結果から明らかのように、すべてのシュート確率が低かったです。恩塚 HC がワールドカップに向けて語っていたのは、「3Pは40%以上、2Pシュートは60~70%が目標です」でした。

今回の強化試合では、目標のシュート確率には達しませんでした。選手全員が「空いたら打つ」は徹底できていたと思います。特に3Pに関しては、戸惑ったり躊躇したりする選手は皆無でした。自覚と覚悟が感じられました。本番に向けてしっかり調整をしていくことと思います。

続いてリバウンドです。日本のリバウンドのコンセプトは、DRはボックスアウトでサイズのある相手のセンターやパワーフォワードを封じて、その他の選手がマイマンに体を当てて押え、早目に跳びこんで取ることでした。ORは相手のボックスアウトをかいくぐって、早めに落下点に跳び込み取るか、取れそうもなければタップしてはたいたボールを他の味方が取ることでした。

今回はボックスアウトに課題を残しました。相手のサイズのある選手に押し込まれる場面が少なからずありました。特に第2試合では相手のORに苦しみました。リバウンドは、日本代表にとって永遠の課題と言えます。次号では、恩塚 HC のコメントを交えて特集号のまとめとします。